

生成 AI、想像力、そして共通教育

共通教育部長 澁谷 政子

最近の生成AIの進化の速度は驚異的です。数年前であれば、ある種のぎこちなさによりすぐに判別できましたが、今ではAIの提供物かわからないほど精度があがっています。未来学者のカーツワイルが、早くも1999年の著作において、2029年までにAIは人間レベルの知能に達すると述べたことは有名ですが、あと3年を切った2026年の現在、ありえない話ではないと思わせるほどです。同氏はさらに、2045年には人間とテクノロジーの境界が消滅する「特異点（シンギュラリティ）」に達するとも述べており、この予測も実現するかどうかと思うと、漠然とした不安も覚えます。

一方、いわゆる“機械化人間”や“心をもつロボット”のモチーフは、20世紀以降の小説、SF、映画、アニメ、戦隊モノ番組などに、繰り返し登場しています。19世紀においても、ドイツ・ロマン主義のE.T.A.ホフマンによる幻想小説『砂男』（1816）には、主人公を魅了し破滅に導く絶世の美女ならぬ美ロボットのオランピアが登場します。一気に遡れば、古代ギリシャ神話にはクレタ島を護衛するロボットのタロスの物語があります。こうしてみると、人類は古えより、物質に生命と意思が宿ることを想像し、その実現への願望と恐れを抱いていたと言えるでしょう。八百万の神はこの志向の原点と言えるでしょうし、私たちが話したり文章を書いたりする際にごく自然に使う擬人法も、同じ想像力のうえに成立するものです。生成AIを

めぐる現在の状況は、科学の進歩による現象であるだけではなく、人類の想像力と科学とのコラボレーションの壮大な歩みが導いたものと捉えることができます。

想像力や直感とは、無から突然に降りてくるのではなく、離れていたり対立しているものごとを新たに結ぶ力である、とよく指摘されています。既存のものから、今までになかった意味やイメージが生じます。ペガサスを想像するには、「馬」と「翼のある生き物」を知っていることが前提になります。現実世界でも、荷車とエンジンから、機関車。音の振動と電気の強弱から、電話。こうした成果はイノベーションとも呼ばれてきました。異なるもの、遠いものを結びつけてみようという想像力、思いつき、あるいはイタズラ心。知識やアイデアのタネがあればあるほど、イノベーションが発動する可能性が広がることは予想に難くありません。ちなみに、現実界のプロダクトとは異なるレベルで、こうした結合や跳躍のトライアルを行っているのが、アートの世界と言えるでしょう。（従って、アート思考はイノベーションと密接な関係がありますが、しかし、アート自体はトライアルそのもの、目的をもたぬ運動体であることは、確認しておきたいと思います。）

現在、身の回りにあるAI検索ツールは、人の指示に対してほぼ忠実に情報を収集し、次の質問候補まで親切に提案してくれるようになりました。

それでも現時点では、きわめてまっとうな関連性の範囲に収まっています。ここで、何を指示するか、何を選ぶか、何を関係づけてみるか。ここでAIとの勝負という気分にもなります。以前であれば、この結合や跳躍は、手作業で情報収集し把握していく一定の時間のスパンのなかで、自然と生じるものでした。自分の学生時代を思い起こせば、文献を探し、ノートやカードにまとめ、興味をひいた参考文献に進み、といったプロセスを繰り返すなかで、疑問が浮かび、探りたい方向性が見えてきました。時には、たまたま隣にあった本に惹かれて別の方向に行くことも。効率が悪いようでいて、時間をかけるうちに発想が芽吹いてくる感覚に、自身の成長の手応えを覚えたものです。しかし情報収集自体がスピードアップしている今、AIが提示するルールの上で妥協してしまわないよう、今まで以上にクリティカルな視点を磨き、自分のなかの思考や感覚のほんのわずかな動きを見逃さないようにしなければと感じています。

このような状況の中、大学教育が大きな転換期に直面していることは明白です。共通教育も然り。AIが学術的な問いに対して、親切な概説も分かりやすい要約も、そしてその出典も整然と提示するようになった今、もはやその役割は終わるのでしょうか？ 単なる知識提供の機会と捉えてしまうと、そうかもしれません。しかし、AIの情報収集と提案に対して、“まっとう”ではない問いができる力の育成が求められています。そう考えると、学生にとって遠い分野の知識、理論、物事の捉え方、世界観に、半ば強制的に一気に触れる機会は、いわゆる“エコーチェンバー現象”に穴を開けるものとしても機能するのではないのでしょうか。新しいことに出会った人間は、すでにある自分の認知ネットワークの中のどこかに、どうにかして整理しようとしています。場合によっては曖昧な位置どりにもなります（ゲシュタルト心理学の“アヒルウ

さぎ”のように)。よくわからないものに出会えば出会うほど、認知の連鎖・結合・比喩の機能が作動し、想像力のネットワークが広がり鍛えられる、これを目指したい。従来の理系・文系といった学びの分類の見直しの動きも加速しています。これからの高度専門職業人にとりわけ新しい価値の創出が求められるならば、専門の力量とともに、それと掛け合わせられる異なる分野、異質の価値体系の存在に触れることが確実に必要です。

予想外のものとの出会いといえば、究極のブラックボックスは「他人」ではないでしょうか。なんでも受けとめてくれるAIに浸かってしまっていると、他人との対話は理不尽で衝撃を伴う体験になる場合もあるでしょう。だからこそ、大学において、学問という場で、自分とは異質のものとの出会い、折り合いをつけたり吸収したりするポジティブな体験することには大きな意義があるはずです。そこから実社会におけるトレランス、サステナビリティ、あるいはコンヴィヴィアリティ（ここでは“歓待性”と言っておきます）の態度が涵養されるのではないか。大学と学問の世界に身を置く者として、ここに希望を持ち続けたいと思います。共通教育においても、グループワークやワークショップ方式の学び、地域づくりに関わる科目や他学部や他大学の学生と「知」を軸に対話する機会の充実が、重要な意味を持ち得ます。共通教育を大学の学びの豊かな土壌として機能させる方策についてこれから議論の輪を広げていきたいと思います。豪言壮語すれば、多種多様な生命と物質が共に生きる“地上的”な眼差し（ラトゥール風）を道標に。そしてまずは、学生が好奇心をもって斜め上をいく発想のタネを取り込み、そして真摯な学びのなかで少し先に出会うであろう、ヒラメキの時のために。

共通教育科目成績分布表について

教務課 学務総務・共通教育担当 安本 聖司

文京地区共通教育委員会では、2021年度より、教育の質保証に関する全学的な取組の一環として、学期ごとに「共通教育科目成績分布表」を作成し、担当教員の皆様にご参考としていただけるよう、共通教育の成績分布状況をお知らせしています。2023年度からは、運用を変更して広くご意見を聴取する方針とし、ご意見をいただきながら、成績分布表に改善を加えています。これまでの改善点をいくつかご紹介させていただきます。

・科目GPAの色分け

分布状況を見やすくするために、科目名称欄に色付けを施しています。科目GPAが2.0超～2.5未満の科目は無色（白のまま）ですが、2.5以上、3.0以上、3.5以上の科目は青を、2.0未満、1.5未満、1.0未満の科目は赤をそれぞれ基調にして、色の濃さを3段階に変えています。

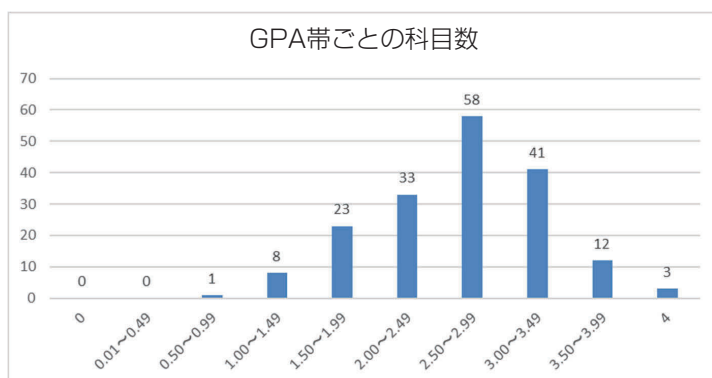
	3.50～4
	3.00～3.49
青基調↑	2.50～2.99
	2.00～2.49
赤基調↓	1.50～1.99
	1.00～1.49
	0.99～0

・科目GPA帯ごとの科目数グラフの追加

2023年度後期より、おおよその科目GPAの分布を把握できるよう、科目GPA帯ごとの科目数の状況を表示するようにしています。2023年度後期および2024年度後期では2.00-2.49（上記色分けで白）の科目が最も多く、2025年度前期においては2.50-2.99（青基調1段階目）が最も多い分布となっています。

2025年度前期の科目GPA分布

科目GPA帯	科目数
0	0
0.01～0.49	0
0.50～0.99	1
1.00～1.49	8
1.50～1.99	23
2.00～2.49	33
2.50～2.99	58
3.00～3.49	41
3.50～3.99	12
4	3



・科目放棄率の追加

成績評価「不受」については、科目を放棄し授業に出席していない者に対して使用されるケースが多いものとなりますが、「不受」の運用は全学で統一されておらず、所属学部によっては「不受」の評価を付すことができないという実情があります。このため、当初は「不受」の成績については科目GPAの計算に含めない運用としていましたが、これを不可と同等に計算に含めることとし、さらに、「不受」および「素点0点」については科目を放棄したものと見なし、放棄率を参考として表示するようにしました。その結果、再履修科目・集中講義・オンデマンド科目では、比較的放棄率が高くなる傾向が見られました。

参考データ			
不受	素点0の人数	放棄者数	放棄率
10	1	11	14%

・教養専門教育科目の色付け運用の変更

上記の科目GPA値による色分けのほか、前年度から科目GPAが1.0以上変動している科目には緑枠を、履修者が少ない（5名以下）ため評価に大きな変動が生じやすい科目にはオレンジ枠を付けていますが、専門教育科目を共通教育科目として他学部・他学科に開放する「教養専門教育科目」においては、履修者がいた場合に機械的に色付けを行うと、ほとんどの科目がこれらに該当し、見辛くなる点についてご指摘をいただきました。このため、教養専門教育科目については、これらの色付けの対象外とするよう変更しました。

また、「教養専門教育科目」については、制度の趣旨を十分に理解しないまま他学部の専門科目を履修し、取消手続きを行わずに科目を放棄するケースが散見されたことから、対策として、システムから気軽にクリックして履修できる仕組みを改め、教務課にて説明を受け、趣旨を理解したうえで、申請書（紙媒体）により履修登録を行う運用に変更しました。その結果、2025年度前期においては、受講意思が確認できた1名のみが履修登録を行う形となっています。

なお、「教養専門教育科目」は、お認めいただければ市民開放プログラムの対象科目とすることも可能です。学習意欲の高い市民の方と、上記の運

用変更により、現在は意欲のある他学部・他学科生のみが受講する形となっています。よろしければ、ぜひ先生方が担当されている専門教育科目を、「教養専門教育科目」として開放いただけますと幸いです。（例年12月頃に実施しております共通教育科目の時間割照会にて、「教養専門教育科目」の開放も併せて募集しております）。

上記の改善は、共通教育科目成績分布表の公開と併せて実施している意見照会（Google Formsにて収集）においていただいたご意見や、共通教育委員の先生方からいただいた提案を基に実施しています。ご感想や些細なお気づきの点でも構いませんので、共通教育科目成績分布表をご確認いただいた際には、ぜひ意見照会フォームへのご回答にもご協力いただけますと幸いです。

共通教育においては、様々な分野・形式の科目があり、また、受講する学生も多様な所属・学年の学生が入り混じるため、科目の特性や事情が異なり、全科目を同一の尺度で比較することは困難ではありますが、共通教育全体の状況を俯瞰し、情報共有を図る機会として、今後も本運用を継続していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

共通教育の理念

共通教育は、学生に広く学問の知識や方法を修得させることによって、グローバル化した社会や知識基盤社会に対応できる総合的な判断力と行動力を有し、地域社会の発展に貢献できる人間性豊かな社会人となるための「教養」を身につけさせるとともに、円滑なコミュニケーションの基盤となる高い語学力及び専門科目の履修に必要な知識等を修得させることを目標とする。

編集後記

今回のフォーラム誌では、始めに、2025度から教育担当の理事／副学長に就任されました澁谷政子先生に、共通教育に寄せる期待をご寄稿いただきました。社会のAI化が急激に進むなか、共通教育が果たすべき役割、あるべき姿も急速に変化しています。

（編集委員：熊倉光孝、磯崎康太郎、ヘネシークリストファーロバート、近藤雄一郎、小林深太、田中志敬）

皆様の議論の輪を期待します。続いて2番目の記事では、教務課 安本聖司様から成績分布表の読み解き方をご紹介いただきました。成績分布を検証し改善につなげることが教育の質保証に必要ですが、実施方法自身を良くすることも重要です。併せて是非ご一読下さい。

福井大学共通教育フォーラム

●発行日 2026年3月 ●発行者 福井大学共通教育部

●連絡先 学務部教務課 学務総務・共通教育担当 Tel 0776-27-8627 Fax 0776-27-8519 E-mail:kyoumu-kk@ml.u-fukui.ac.jp